

## 花あっちこっち

### スマレ（堇）

花言葉：思慮・奥ゆかしい



タチツボスマレ

スマレは3月から5月にかけて、公園や道ばたに花を咲かせる野草で、深い紫（堇色）の可憐な花を咲かせる。国産、外国種とも合わせると数百種類と数多くあり、一般にはそれらを区別せずにスマレと総称している。

日本を代表するスマレはタチツボスマレ（立壺堇）である。

呼び名は花の形が、大工道具の「墨入れ（墨壺）」に似ていることから「すみいれ」の呼びがしだいに「すみれ」になったとの説とのことである。

スマレの園芸品種として「パンジー」、「ビオラ」が多くの人たちに親しまれている。パンジーは日本には江戸時代に渡来し、当時は「三色スマレ」と呼ばれていた。

「山路（やまじ）きて なにやらゆかし 堇草（すみれぐさ）」  
松尾芭蕉



パンジー

## 耳寄り情報

### 歴史案内サインが設置された

瀬谷区らしい歴史ある場所など紹介する案内サイン（解説板）が、瀬谷区役所地域振興課により設置された。

川口製絲株式会社跡の案内サイン全文

設置日：平成28年1月 設置場所：瀬谷区本郷一丁目9 川口邸正門横

瀬谷区（旧鎌倉郡瀬谷村）は、相模原台地上にあって、桑の栽培に適した土地で、かつて養蚕業が栄えていました。明治中期から昭和初期にかけて付近に、9つの製糸工場が建ち並び、製糸業が盛んでした。中でも、明治35年（1902年）6月に操業した「本郷館製糸場」は、周辺の製糸工場でも最も長く稼働し、大正10年に川口製絲株式会社と名前を改めた後、昭和34年（1959年）頃まで製造を続けました。製糸の品質は国内のトップクラスで、製品の全てをアメリカへ輸出していました。昭和6年頃の最盛期には従業員200人を超え、全員が製糸工場内の寄宿舎で生活し、場内は広大で、畑、スポーツ施設、女性従業員がマナーや教養を勉強する学校もありました。このように製糸工場は、地域の人たちが働き、地域の原料を使って糸をつくり、企業が繁盛し、地域の活性化にも寄与していました。

現在も、ここ川口邸には、当時の製糸工場の正門が残されています。

## まちかど

### あの町この町 ⑭ 北新（きたしん）

昭和57年の町界町名地番整理事業の施行にともない、瀬谷町の一部から新設した町。町名は「北村」、「新道」の字名があり、通称の「北新」を地元の要望により採った。西側を境川が流れ、南東側を中原海道が通る。

町内にある宗川寺の山門を入ると左右の夫婦銀杏は昔から縁結び、安産祈願の信仰され、樹齢260年と云われ市の名木・古木に指定されている

門前を通る中原街道の瀬谷問屋場跡は天正6年（1578年）小田原北條氏の関東経営の駅路として、中原街道瀬谷に問屋場が設けられ、のち徳川氏の江戸開府により駿河国西宮の住人、石川弥次郎衛門が、問屋場の運営を幕府より託されて、江戸～平塚間5駅の中宿、瀬谷駅の問屋場として、江戸時代270年にわたって、中原往還の道筋の人馬諸貨物の運送、継立てにその役割を果たしたといわれる。（これより東方80mのところ、瀬谷区役所掲示より）



宗川寺の夫婦銀杏